

# 障害者支援をしたいという思いがきっかけで、 産業カウンセラーを目指すことに

那珂市 平野 昌美

**自立相談支援機関の相談支援員をしておられる平野さん。少しでもご本人の希望に沿った就労に繋がるよう、日々の相談支援業務に取り組んでおられます。**



20年ほど前、私は企業の採用担当者で、新卒の採用と同時に障害者の採用と雇用管理も担当しており、毎年開催されるハローワーク主催の障害者の就職面接会に出かけていました。

当時の就職面接会は、割り当てられた机に座り、面接希望の方がその前にいらっしやって面接をするスタイルで、たいがいの企業では男性の担当者が一人か二人、企業ブースに座っていました。

私も同行したスタッフも女性だったので、おぼさん二人が座っているブースは話しやすいと思われたのか、いろんな人が入れ替わり立ち替わり、私たちの前に来て話をしてくれました。軽度知的障害の青年、自閉症の高校生、知的障害のある女性など、時には深刻で重い話題になることもありました。

そんな人たちの話を聴いていると、何とかこの人たちを雇用してあげられないものかと悩みました。

当時、勤務先企業では、身体障害のある方は何人も採用されていましたが、それぞれ技術系の大学を卒業していたり、専門知識を身につけていたり、その他の一般の社員同様に仕事ができる人ばかりでしたので、知的障害や精神障害の人を雇用

したことが無かったのです。

どうしたら、知的障害や精神障害の人たちに働いてもらえる場所を作ることができるのだろうか？と、思い悩んでいるときに知ったのが「特例子会社」というものでした。

あるとき、一般の企業の中に「特例子会社」を作って、障害者の働く場所を増やしたという人物の講演会が近くで開催されるという記事を見つけ、何かヒントがもらえるかもしれないと聴きに行きました。

講師は電機メーカーの人事に所属している、私よりも若い女性でしたが、勤務先の会社に知的障害者の雇用促進のために特例子会社の設立を提案し、実現したというお話でした。その取り組み自体にも惹かれましたが、とりわけ強く興味を持ったのが、その女性の経歴の中で紹介されていた「産業カウンセラー」という資格でした。

初めて聞く資格だったので、講演終了後に講師を追いかけ「その資格はどうやって取得するのですか？」と質問しました。

日本全国各地で養成講座を開講していると聞

き、調べてみると水戸市でも開講していました。さっそく日本産業カウンセラー協会に電話してみると、当時、産業カウンセラー養成講座は大変な人気で、翌年に開講される水戸市での講座はすでに定員いっぱいになっていました。電話を受けてくれた協会の方は非常に親切で、「次年度の募集要項ができたなら、すぐに郵送します」と言っていて、約束通り次の年に募集要項を送ってくくださったので、私は無事に水戸教室の4期生として養成講座を受けることができました。

さて、産業カウンセラーへの道を歩み始めた私でしたが、勤務先で異動があり、社員教育を担当するようになり、障害者に関わる仕事からは離れてしまいました。教育の仕事でも、キャリア開発ワークショップなど、産業カウンセラーの資格を生かせる仕事に関わらせていただいたのですが、障害者を支援する仕事をしたいという思いはなくなりませんでした。

何とかしてこの先、障害者に関わる仕事があったらいいなと思ったとき、自分には障害とその支援についての知識が何もないことに、はたと気が付きまし

た。どうかして障害について勉強したいと考えているとき、筑波大学に「障害科学」という分野があることを知り、私の周囲には大学や大学院に入りなおして勉強をしている友人知人が数人いましたので、私もやってみたく、私にもできるのではないかと思うようになりました。

私は幼稚園教諭と保育資格が取得できる短期大学の卒業でしたので、まず、大学院への受験資格の審査を受けなければなりません。提出する書類には職務経歴や大学院でやりたい研究のテーマについて書く必要がありますが、ここでも産業カウンセラーとしての活動経歴を記述することができました。もちろん、入学試験があったのですが、筆記試験はこれまで独学で続けていた発達障害についての勉強と、障害全般についての書籍を集中的に読み込むことで、なんとか回答用紙を埋めることができました。

無事に入学試験に合格し、大学院に入学することになったとき、退職して学業に集中することに



トーキングマット

したのですが、全く収入が無くなってしまったのも寂しいと感じていました。その時声をかけてくれたのが勤務先の総務部

門の課長職の方で、私の長年の人事・採用・教育の業務経歴と産業カウンセラーの資格に注目し、地元の別の大学の就職担当講師の仕事を紹介してくれました。

そんな経緯で、週1日、就職指導の仕事をしなから、その他の日は大学院で障害科学の勉強に集中することができました。

大学院での2年間は、たくさんの新しい出会いと学びがあり、研究や論文の執筆は大変ではありましたが、毎日をわくわくと楽しんでいるうちに過ぎてしまいました。障害科学専攻の約40人のクラスメイトは、自分の子どもたちと同世代で、まさに親子ほどの年の差がありましたが、私自身は全く気にすることなく学生生活を楽しましました。

大学院では授業の一環で、障害者の就労に取り組んでいる様々な施設や法人を訪ねて見学させていただいたり、発達障害当事者の集まりに同席させていただいたり、今まで知らなかった世界ののぞかせていただくことができました。

その他、先生方が学会やイベントを開催する際には積極的にお手伝いを申し出て参加しましたが、長年の会社勤めで培った経験は、きつとお役に立てたことと思います。

そのうちのひとつ、障害者や高齢者の「支援付き意思決定・意思決定支援(SDM)実践フォーラム」のお手伝いを経験したことは、その後、先生にお誘いいただいて「一般社団法人日本意思決定支援ネットワーク(SDM:Japan)」の運営に参加するようになるなど、現在に繋がっています。

また、産業カウンセラーの自主学習会はずっと

参加しており、大学院で学んだ障害者支援の知識や、学会の情報などを、メンバーにシェアするようになりました。ハローワークなどを訪れる就労困難な人たちの中に発達障害のある人がいるのだとしたら、シェアした情報は何らかのお役に立つのではないかと思います。

そんな中、自主学習会メンバーの一人からお声をかけていただき、一昨年から隣の市の自立相談支援機関の相談支援員として仕事をできるようになりました。仕事を始めた職場では、新型コロナウイルスで仕事を失い、支援を求める生活困窮者の相談で、目が回るような忙しさでしたが、以前からの予想通り、生活に困っている人たちの中には何らかの障害を持っていると思われる人がいました。

相談に訪れる人たちとの面談にあたっては、産業カウンセラーとして身につけた話を聴くスキルと、大学院で学んだ知識を生かして、少しでも本人の希望に沿った就労に繋がることができるよう、日々の相談支援業務に取り組んでいます。

なお、日本意思決定支援ネットワーク(SDM:Japan)では、障害がある人とのコミュニケーションや意思決定支援のツールとして、「トーキングマット」を提供しています。これは障害がない人との面談で、本当の気持ちを聴き取るために役に立つツールだと思っています。産業カウンセラーの皆さんのお役にも立てるのではないのでしょうか。ご興味がありましたら、ぜひホームページをご覧ください。

日本意思決定支援ネットワーク(SDM:Japan)のホームページ <https://sdm-japan.net/>